

## アフガニスタン小中学生のオンライン教室の取り組み

社会福祉法人 さほうとにじゅういち

日本語学習コーディネーター

田中 由美子

2021年8月のタリバンの侵攻により同年の秋に日本に退避してきたアフガニスタンの方々の中には、義務教育年齢にある小中学生がいたが、十分な教育の機会を得られないまま、2022年の9月から定住先の小学校に通学している。そのような中、1日も早く日本語力を身につけ、学校での教科学習に対応できるようオンライン学習支援教室が2023年の6月にスタートした。

### 事業内容

#### **難民・避難民の小中学生と地域が教育でつながるためのブリッジング学習支援展開事業**

2024年度日本国際交流センター休眠預金事業「外国ルーツ青少年の教育スタート支援事業」

対象：アフガニスタン出身の小中学生（2021年8月にタリバンの侵攻により同年の秋に日本に退避してきたアフガニスタン人で2023年12月31日現在、栃木、千葉、埼玉に居住している23人）

内容：オンラインを利用した日本語と学校教科の学習支援教室

週4日 月～木

小学生：17:00～17:45(2年生～4年生) 17:50～18:35(高学年)

中学生：18:45～19:45(1年生～3年生)

(小学生は週1回授業後に45分、中学生は週2回授業前に90分の個別教科支援あり)

\* 学習効果を考え、何回か形態を変えてきているが、上記は2024年1月からの体制

その他、週末対面教室もスタートし、母語通訳を配置した相談会や親向け勉強会（日本の教育制度など）、支援者向け勉強会（日本の難民受け入れなど）を行なっている

今回、上記のオンライン日本語教室のコーディネーターを務めるにあたり、以下の課題を設定した。

### 課題設定

#### **日本語力、学力のサポートをしながらスムーズに学校生活に入っていけるような橋渡しができる教室づくり**

そのために

- ① 子どもたちの日本語力を把握することで支援内容や支援体制を内省して改善する
- ② 現在の子どもたちの日本語力やオンライン教室での様子を各家庭に共有することで、子どもたちの学習環境や生活面での課題についてより深く理解し、保護者と共に今後どのように学校生活や進学を進めていくか共に考える
- ③ 支援の内容や体制を改善するためには、支援者（日本語指導者）が同じ方向を目指して協力体制をつくれる関係性を構築することが重要であり、そのために共通の評価ツールを用いてそれぞれの子どもたちの日本語力や課題を語り合える場を設ける

## 具体的な活動計画

- ① DLA (Dialogic Language Assessment)
  - ・DLA を通して子どもたちの言語能力、認知能力を把握して、支援者が学習支援の必要性を知る。
  - ・DLA の結果、提示される調査結果や評価を拠り所として、日本語指導者間で建設的な意見交換をし、支援体制や支援内容について改善を図る
  - ・DLA の結果を各家庭へのひとつの判断材料にすることにより、情報交換しながら教室運営改善につなげる。
- ② DLA 後のアンケートの実施（アンケート対象は子どもとアセスメントをした教師）
- ③ ヒアリング（子どもおよび保護者対象）
- ④ その他（夏休み・冬休みの対面教室、高校進学ガイダンスへの出席など）

## 実施報告（主なもの）

2023. 8 月	夏休み対面教室実施（栃木県小山市）15、21、24、29 日に実施
9 月	多言語通訳者とコーディネーターによるヒアリング実施 （オンライン。後日、ヒアリング結果を他の教師と共有） 12 月 17 日には 2 家族のヒアリングを小山にて実施
10.7	外国人親子のための高校進学ガイダンスに出席（栃木県小山市）
10.14	DLA 勉強会（オンライン）2 回目は 11 月 14 日、3 回目は 11 月 25 日に実施
2023.12/2024. 1	DLA 実施（栃木、千葉、埼玉）21 件、アセッサー 7 名で対応 栃木と千葉で冬休み対面教室（12 月 25 日～1 月 8 日までの約 6 日間）

\* 2 月の予定

- ・2 月 4・11 日に DLA 検討会（診断シートをもとに、子どもたちの傾向や問題など話し合う）
- ・アンケート実施

## 実施してみた

- ・アセッサーはほぼ全員が DLA 初心者のため、アドバイザーの力を借りつつも読み物の選定など含め、うまくいかないことがあったが、今まで見えなかった、または気が付かなかった子どもたちの日本語力や学ぶ力に気が付くことができた。また、勉強会を重ねることで教師間の連帯感が強くなったのではないかと思う。
- ・子どもと 2 家族のヒアリングを通して、日本語や教科に関して、子どもたちの現段階での力と、これから伸ばしていかなければいけない力に関して、認識の違いを感じるがあった。
- ・オンラインはどこからでもアクセスできるため、子どもたちは比較的欠席もなく来てくれているが、対面になった時に、市内であっても場所によっては子ども達だけの移動が難しく、結果的に参加状況にばらつきがみられた。また教室実施の周知が想定以上に難しかった。

## これからの課題

- ・DLA で得られた結果をどのように子どもたちの日本語力と学力に還元させていくか、また教室運営に反映させていくか、そして各家庭への FB として使っていくか。
- ・オンライン教室でできることは何か、対面教室でできることは何か明確にしながら、2 つをすることで効果があがる仕組みを作っていきたい。そのために教室に来やすい仕組みも必要。